

白山ふるさと文学賞

第六回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生5・6年作文の部 優秀賞

夢に向かつて

明光小学校六年

北川 きたがわ

莉菜 りな

私はアナウンサーになることが夢です。

アナウンサーは、大事な情報をみんなに正確に伝えるという仕事です。アナウンサーになるうと思つたきっかけは、どう然入った放送委員会にあります。

この時、放送するのは、とても重要な仕事だということ、そして楽しいことだと思ひました。なぜなら、前に、そうじの放送が無かつた時に、そうじが始まつているということがありました。だからみんなは放送がないと、時間を守れないのかなと感じました。次に、なぜ楽しいと感じるかという、何回も何回も練習して、放送が成功した時に、とてもうれしい気持ちになるからです。また、やりがいを感じる時もありました。それは、友達や先生に

「今日の放送良かったよ。」
と言つてもらえたことです。この言葉で次の放送へのやる気もわきました。

五年生の時にアナウンサーの体験をしたことがあります。その時も、実際のニュースを読む経験をしました。早口言葉の練習をしたり、原こうにふりがなを打つたり、カメラテストをしたりしました。このような体験は初めてでした。そこで、学んだことがあります。それは、アナウンサーはたくさんの勉強をしているということです。例えば、原こうにふりがなを打つ時には、漢字を勉強しておかないといけません。早口言葉はニュースを正確に伝えるために必要なことです。だから、何日かこの練習をしなかつたら、正確に言えなくなるんじゃないかなと思ひました。

私はピアノを習っています。ピアノの発表会では、きん張し、顔が赤くなつてしまいます。アナウンサーの体験をしたときも、カメラがあつて、きん張してしまいました。今後、このようなことに慣れていきたいと思ひました。

ニュースを見て、私は、とても感動したことがあります。それは、あ

る地しんでの出来事です。ある一人のアナウンサーが地しん速報に対し、一生けんめいひなんへの呼びかけをしていました。私は、この姿を見て感動しました。わけは、スタジオがゆれている中、一人でも多くの人を助けようと放送していたからです。

私が幼いときに見たニュースでは、アナウンサーは大事な情報を伝える仕事だと思つていました。でも、あのアナウンサーの呼びかけを見て、アナウンサーは、人を助けることもできる仕事だと分かり、しよう来アナウンサーになるということを固く決意しました。私は、みんなの笑顔を増やせるような人になりたいです。助けるということは笑顔につながつていると思ひます。例えば、家族一人が地しんに巻きこまれたとします。すると、家族の笑顔は消えてしまいます。でも、家族一人が助ければ、家が地しんでどんなにきたなくなつても、笑顔が見えると思ひます。だから私は、一人でも多くの人を助けることができる人になりたいです。

私は、運動会の際にアナウンスをしました。この時、実況中継をしました。初めての体験で、ある程度の言葉を考へてあつても、本番にならなないと分からないから、とても難しく大変でした。でも、楽しかつたのを覚えています。自分がその間レベルアップした気持ちになり、やりがいを感じられました。ニュースを見ている時に、実況中継をしている人を何回も見ます。そんな人を見ると、なんでその場ですぐに、言葉を考へることができるといふも思つていました。この姿は、かっこよくて、魅力ある仕事だなと感じました。

最近、人工知能という言葉をよく耳にします。周りからは「しよう来アナウンサーは、必要ないんじゃないか。」と言われ心配しています。けれども、地しんの時の実況中継で、あのアナウンサーが見せてくれたように、人には原こうをただ読み上げるだけでなく、熱意ややさしさがあると思ひます。だから、私も人工知能に負けないようにがんばりたいです。アナウンサーは、大変なことが山ほどあると思ひます。だから、た

くさんの勉強をすることが必要です。それでも、一人でも多くの人を助け、一つでも多くの笑顔をつくることができるアナウンサーになりたいです。これからも、アナウンサーへの道をあきらめずに夢に向かって歩み続けたいです。自分が実際にスタジオに立つことは、まだ考えられません。が、一歩ずつ一歩ずつ小さなことでも取り組んで夢に近づいていきたいです。

